

家族パターンと伝統的宗教行動の訓練

—とくに小学校上級児童について—

森 岡 清 美

1 問題の所在

昭和40年9月東京で開催された第9回国際家族研究セミナーは、その共通テーマの1つとして、The Consequences for Children of Varying Family Patterns, すなわち「異なる家族パターンが児童にどのように異なった影響を与えるか」、という主題をとり上げた。この主題は、異なる家族パターンと児童の行動、という問題のほか、異なる家族パターンと児童の育て方 child-rearing practices, 育て方と児童の行動、という2段の問題を含んでいる。前者は「育て方」を媒介することなく、直接に異なる家族パターンと児童の行動を因果関係で結びつけるのに対し、後者は「育て方」を媒介させるので、2段の問題になるのである。前者はいわゆる無為にして化す側面をクローズアップし、後者は育て方としてとらえうる側面を対象とする。両者の区別は判然たるものではないが、この区別をつけておくことは必要である。

われわれは、育て方が問題になる後者をとり上げることにした。後者のなかでも、「異なる家族パターンと児童の育て方」を関心の焦点に据えた。何故そうしたかといえ、問題を限定することが必要であるからであり、限定するに当たって捉えやすい問題から出発するのが賢明だと考えられたからである。

異なる家族パターンと児童の育て方。この問題は異なる家族パターンを独立変数とみ、児童の育て方をその従属変数と捉えている。児童の育て方の独立変数であるような家族パターンには、どのようなものが挙げられるだろうか。それには、(A)ある家族群にとって共通のものと、(B)家族群内でも異なり

うるものとがある。この2つのものは別々に存在するのではなく、(A)共通のものが(B)異なるものの異なる幅を規定しているといった、密接な関係にあるが、にもかかわらず両者を区別しておかねばならない。まず、(A)一定の家族群にとって共通のもの、いいかえれば家族群ごとに異なりうるものには、(1)階層および職業による異同、(2)地域による、農村・都市による異同、(3)民族および人種による異同、(4)所属宗教団体による異同、の4つがあり、(B)家族群内でも異なりうるものには、(1)親の児童観そのほか価値態度体系、(2)家族(世帯)構成、(3)家族内の相互作用パターンの3つがある。家族構成と相互作用のパターンはそれぞれさらに次のようにくたぐることができる。

(2)家族(世帯)構成

- (ア) 核家族世帯と拡大家族世帯
- (イ) 小家族と大家族
- (ウ) 児童の性別組合せを異にする家族
- (エ) 異なる発達段階にある家族
- (オ) 有業主婦の家族と専業主婦の家族
- (カ) 正常家族と欠損家族
- (キ) 嫡出子のみの家族と非嫡出子を含む家族

(3)家族内の相互作用パターン

- (ア) 権威(勢力配分)のパターン
- (イ) 役割分化のパターン
- (ウ) 夫婦関係(調和不調和)のパターン
- (エ) 親子関係(愛情分布)のパターン
- (オ) きょうだい関係のパターン
- (カ) 嫁姑関係(調和不調和)のパターン

(3)

次に、異なる家族パターンの従属変数であるような児童の育て方として、従来多くの心理学的研究がとってきた、愛情拒否一溺愛(過保護)、厳格一放任という把え方はせず、育て方の志向、育て方の実際(具体的に挙示しうる訓練の有無)、訓練のきびしさと頻繁さ、訓練担当者、の4つの局面を指摘し

ておく。また、育て方を問う場合には、どの領域の育て方なのか、領域を明らかにしておかねばならない。領域の分類にはさまざまありうるが、ここでは通念に従って、基本的生活習慣（食事・排便・睡眠・着衣・清潔）、人間関係（礼儀作法・きょうだい仲・友達づきあい）、公衆道徳、学習、勤労、金銭・消費、宗教を挙げておこう。

さて、この主題に応じてわれわれが行なった調査研究では、家族のパターンを（A-2）地域による、農村・都市による異同、ひいては（A-1）階層および職業による異同、について分別することとした。（A-3）民族および人種による異同や（A-4）所属宗教団体による異同は、アメリカのように黒人や東洋人などを含む社会、またキリスト教の新教・旧教・ユダヤ教といった宗教帰属が家族生活のあり方に影響を及ぼす社会にとっては重要であるが、日本では異民族異人種にして永住する者はきわめて少なく、またキリスト教徒なども頗る少数であるから、（A-3）、（A-4）のごときはあまり問題にならない。そこで、（A-2）、（A-1）について家族パターンをみることにしたのである。われわれはこのような着眼を生かしうる地区として次の3地点を選び、昭和39年度から昭和40年度にわたって臨地調査を実施した。

農村地区 山梨県東八代郡八代町（ただし高家地区を除く）

大都市商業地区 東京都台東区南部（柳北小学校・育英小学校管内）

大都市住宅地区 東京都杉並区中央部（杉並第2小学校管内）

これら3地区を代表する職業は、それぞれ農業・商工業・ホワイトカラー的職業（管理・専門・事務）であって、後述の手順でえられた対象児童の父の職業のうちでこれら代表的職業の占める比率が、それぞれ66%（父が非農でも母が農業従事者であるケースを合算すれば73%）、74%、74%であることは、地区の職業的特色を遺憾なく示している。したがって、上の3地点を選択したことは、地域による家族パターンの異同を前提することに加えて、職業による異同を前提することを可能にするものである。

このように、地域的職業的に家族パターンの種々相を含むよう配慮する一

方で、若干の点については家族パターンを一定にしておくことが必要である。その第1は（B-2-エ）家族の発達段階である。これを一定にするためには対象児童を初生子に限り、かつその年齢を揃えることが最上であるが、そのために一定地域から選ぶる対象数が著しく減少することが三鷹市牟礼で行なったプリテストの結果判明した。そこで対象児童を長男長女に限り、かつその年齢を一定にするという、次善の策をとった。かくすることによって、長男長女に限定しないよりは初生子を含む比率が高まることは明らかであろう。児童の年齢については、調査班を幼児・小学校児童・中学高校生および勤労青年の3班に分ち、われわれは小学校児童を担当したので、年齢の選択範囲は自ら狭くなっている。そのなかで小学校5年を選定した（5年生だけでは十分な数がえられなかった山梨県の農村に限って6年生を加えた）のは、自計式の調査に耐えることを考慮すると共に、青年班が調査対象とする中学校生徒との年齢の開きを併せ考慮したからに外ならない。

加えた限定の第2は、（B-2-カ）正常家族と欠損家族のうち、正常家族、つまり児童の両親が健在する家族に限ることであった。そして、これら以外の変数はコントロールせず、あるものは分析の軸として用いた。

次に、児童の育て方については、さきに掲げた項目および領域のすべてをカヴァーする調査を行なった。しかし、本稿で分析しようとするのは、宗教の領域における児童の育て方である。この調査は宗教をとくに焦点的にとり上げたわけではないから、宗教の領域における児童の育て方を究明するためには資料不足の感を免かれないが、宗教の領域のうち、比較的一般的に該当すると考えられる伝統的宗教行動に分析を限るならば、なお大方の批判に委ねるべき若干の研究成果をえたので、ここにそれを公表しておきたいと思うのである。

要するに、農村地区、大都市商業地区、大都市工業地区の3地点における家族パターンは、地区差および各地区を代表する職業差に対応して相異なっていると考えられるが、小学校上級児童に対する伝統的宗教行動の訓練に地区差・職業差があるかどうか。ある場合に、家族パターンにみられる差と訓

練にみられる差がどのように結びついているか、ということを読稿は問題にしているのである。この小さい問題を手がかりとして、異なる家族パターンが児童の育て方にどのような異同を生ぜしめているか、というより高次の問題に接近することを念願するものである。

調査および以下の分析対象について一言しておこう。調査は、小学校児童に対しては関係小学校の協力をえて、調査票による自計式の集団面接を行ない、児童の親に対しては、男女児別に父母の総数がほぼ同数になるように父と母の何れかを指定し、それぞれの自宅において、育て方に関する項目と世帯に関する項目について他計式の面接聴取を行なった。われわれの限定 (1) 小学校5年、(2) 長男長女、(3) 両親健在) を満すと判定された児童は、表1に掲げたように各地区で100人を多少とも上廻る数に達し、その全数について上記の調査が実施されたが、調査期間中不在などの理由で親の面接が1割内外不可能であったため、最終的に完了したのは、農村地区92件、商業地区103件、住宅地区100件であった。

表1 調査対象の数

地区	性別	児童 総数	うち長 男長女	うち調査 が完了した 長男長女	父 母 内わけ	う ち 初生子	備 考
農村地区 (山梨県) (八代町)	男 児		58	51	20・31		* 高家地区を 含む。長男長 女以下の欄は これを含まず
	女 児		50	41	20・21		
	計	292*	108**	92	40・52	59	
商業地区 (東京都) (台東区)	男 児	118	61	53	22・31		**上に兄弟が あり、それが 青年班の対象 になったため、 最初から断念 したのが7人 ある。
	女 児	91	56	50	23・27		
	計	209	117	103	45・58	61	
住宅地区 (東京都) (杉並区)	男 児		50	46	20・26		
	女 児		57	54	23・31		
	計	171	107	100	43・57	73	

2 家族パターンの地区的・職業的異同

前節において前提した家族パターンの地区的・職業的異同については、3地区の概略的な説明とあわせて、すでに別稿で論じたので、ここでは結論だけ述べるにとどめたい。

世帯構成、世帯の来歴、父母の職業と学歴、家族意識の諸点を比較すると、農村地区と住宅地区を両端とし、商業地区をその中間に配置する形で、著しい地区差が認められ、次のような家族パターンが識別される。

(1)農村地区

現在地に20年以上居住する相続世帯で、多くは拡大家族形態をとり、世帯主は地元出身者であって、父母は義務教育を終えた程度の、比較的旧家族意識をもっている、職業世襲率の高い農家世帯。

(2)住宅地区

現在地に20年未満しか居住しない創設世帯で、核家族形態をとり、世帯主は全国から集まっていて、父母は少なくとも中等教育以上を履修し、旧家族意識を大体払拭している、職業世襲率の比較的低いホワイトカラーの世帯。

(4)商業地区

ほぼ(1)と(2)の中間に位置する商業世帯。

ここに識別された3つの家族パターンが、対応する3つの地区を代表している。それでは、これらの異なる家族パターンのもとで、いかに異なった伝統的宗教行動の訓練が見られるであろうか。以下において展開される訓練の地区的比較は、やがて家族パターン間の比較に外ならないことが、以上の指摘からだけでも明らかにされたことと思う。

3 神棚と仏壇の存否

伝統的宗教行動には、神棚・仏壇の拝礼、社寺への参拝、宗教的講集団への参加などがあるが、宗教的講集団へ小学校上級生を参加させることは、農村地区を除いて考えにくく、社寺へ彼らを参拝させることも住宅地区では考

えにくい。これら2種の伝統的宗教行動の訓練は、3地区の何れについてもある程度の現実性がある、というのでない以上、とくに比較調査に及ばぬことである。そこで、伝統的宗教行動のうちでも最も基本的かつ一般的だと考えられる神棚と仏壇の拝礼に限って調査した。

神棚・仏壇の拝礼に関する訓練の地区差を検出するには、まず、神棚・仏壇があるかどうかから調べてみなければならない。表2によれば、神棚・仏壇をとともに保持している世帯が農村地区で88%に達し、商業地区45%、住宅地区23%と著しい開きを示す。これらを両方とも欠く世帯は、住宅地区では35%もあるが、商業地区で15%、農村地区では殆どないにひとしい。このように、礼拝対象としての神棚・仏壇保持率に明瞭な地区差が認められるのである。

表 2 神棚・仏壇の存否

	神棚・仏壇	神 棚 の み	仏 壇 の み	両方ともなし	計
農 村 地 区	88.0 (81)	6.6 (6)	4.3 (4)	1.1 (1)	100.0 (92)
商 業 地 区	44.7 (46)	16.5 (17)	24.2 (25)	14.6 (15)	100.0 (103)
住 宅 地 区	23.0 (23)	20.0 (20)	22.0 (22)	35.0 (35)	100.0 (100)

それではどのような条件をもつ世帯において保持率が高いのであろうか。まず、3地区を代表する職業に着眼して、3地区の枠をほどこいた上で職業別に神棚・仏壇の保持率をみたのが表3である。農業世帯の保持率は最高で95%に達し、商工業世帯はそれについて50%、ホワイトカラー世帯は33%と低

表 3 父親の職業別・神棚・仏壇の存否

	神棚・仏壇	神 棚 の み	仏 壇 の み	両方ともなし	計
農 業	95.2 (59)	1.6 (1)	3.2 (2)	—	100.0 (62)
商 工 業	49.5 (52)	16.2 (17)	21.0 (22)	13.3 (14)	100.0 (105)
ホワイトカラー	33.0 (35)	19.8 (21)	19.8 (21)	27.4 (29)	100.0 (106)
労 務	16.7 (3)	16.7 (3)	27.8 (5)	38.9 (7)	100.0 (18)
無職・不明等	25.0 (1)	25.0 (1)	25.0 (1)	25.0 (1)	100.0 (4)
計	50.8(150)	14.6 (43)	17.3 (51)	17.3 (51)	100.0 (295)

くなっている。なお、労務世帯は最も低い(17%)。他方、神棚・仏壇ともない世帯は、農業世帯になく、商工業世帯で13%、ホワイトカラー世帯で27%、労務世帯で39%と高まっていく。3地区の保持率の差は、地区を代表する職業(昭42, 表4)の保持率の差を反映していることは明らかである。しかし、そればかりではあるまい。

表 4 世帯構成別、神棚・仏壇の存否

		神棚・仏壇	神棚のみ	仏壇のみ	両方ともなし	計
内 訳	核家族世帯	31.6 (55)	23.0(40)	16.7(29)	28.7 (50)	100.0 (174)
	拡大家族世帯	78.5 (95)	2.5(3)	18.2(22)	0.8 (1)	100.0 (121)
	両親・子・そふぼ	73.9 (34)	4.3(2)	19.6(9)	2.2 (1)	100.0 (46)
	両親・子・そふ	92.9 (13)	—	7.1(1)	—	100.0 (14)
	両親・子・そば	78.7 (48)	1.6(1)	19.7(12)	—	100.0 (61)
計		50.8(150)	14.6(43)	17.3(51)	17.3 (51)	100.0 (295)

そこで、世帯構成や世帯の来歴との関連をも検討してみよう。表4は地区の枠をとりて世帯構成別に保持率を分析したものである。これによれば、核家族世帯の32%に対して拡大家族世帯は79%と、格段の開きがあり、他方、両方ともないのがそれぞれ29%、1%と組織的な開きをみせている。3地区の保持率の差は、3地区それぞれにおける核家族世帯と拡大家族世帯との構成比(昭42, 表7)を反映するものといえよう。なお、核家族世帯と拡大家族世帯との保持率を比較して興味深く思われる他の点は、仏壇のみ保有する世帯の比率に差はないが、神棚のみの保持率に大差あり、核家族世帯において保持率が高いこと、そこでは仏壇よりも神棚の方が多いが、拡大家族世帯では逆に仏壇の方が多いことである。

表5は地区の枠をとりて現在地での居住年数別に保持率を算出したものである。居住年数が長くなるにつれて保持率が組織的に高まり、居住50年以上の世帯では95%に達している。その半面、神棚も仏壇もない世帯の比率は5年未満世帯の40%から組織的に減退していく。これによって、3地区の保持率の差は、3地区それぞれにおける大多数の世帯の居住年数(昭42, 表8)を反映するものであることが判る。なお、20年未満までのところでは神棚だ

表 5 居住歴別、神棚・仏壇の存否

	神棚・仏壇	神 棚 の み	仏 壇 の み	両方ともなし	計
5 年 未 満	7.7 (4)	25.0 (13)	26.9 (14)	40.4 (21)	100.0 (52)
10 年 未 満	18.6 (8)	27.9 (12)	20.9 (9)	32.6 (14)	100.0 (43)
20 年 未 満	33.3 (24)	22.2 (16)	23.6 (17)	20.8 (15)	100.0 (72)
50 年 未 満	80.4 (41)	2.0 (1)	15.7 (8)	2.0 (1)	100.0 (51)
50 年 以 上	94.5 (69)	1.4 (1)	4.1 (3)	—	100.0 (73)
無 答	100.0 (4)	—	—	—	100.0 (4)
計	50.8(150)	14.6 (43)	17.3 (51)	17.3 (51)	100.0 (295)

けしかもたない世帯と、仏壇だけしかもたない世帯とがほぼ伯仲するが、20年を超えると、神棚だけしかない世帯の比率がとくに急減することが注目されよう。これは、居住年数の増加に伴なう仏壇の増加に、神棚の増加が及ばなくなることを示している。

最後に、地区の枠をとりて相続世帯・創設世帯別に保持率をみたのが表6である。相続世帯の保持率は78%と断然高く、それに対して創設世帯の保持率は18%と低い。他方、神棚も仏壇もないのがそれぞれ1%、37%とここでも差は大きい。つまり、相続世帯では8割がた神棚と仏壇をもっているのに、創設世帯では4割がたこの2つの家庭礼拝施設を欠如しているのである。したがって、3地区の保持率における差は、3地区における両種の世帯の構成比(昭42, 表9)を反映するものといえることができる。なお、相続世帯では神棚がなくとも仏壇はあるというのが目立っているが、創設世帯では仏壇はなくとも神棚はある、というのが目立つ。これは、さきに世帯構成および世

表 6 世帯の来歴別、神棚・仏壇の存否

	神棚・仏壇	神 棚 の み	仏 壇 の み	両方ともなし	計
相 続 世 帯	78.0(124)	4.4 (7)	16.4 (26)	1.2 (2)	100.0 (159)
創 設 世 帯	18.0 (24)	26.3 (35)	18.8 (25)	36.9 (49)	100.0 (133)
不 明	66.7 (2)	33.3 (1)	—	—	100.0 (3)
計	50.8(150)	14.6 (43)	17.3 (51)	17.3 (51)	100.0 (295)

帯の居住歴の項で言及したところと軌を一にし、また神棚と仏壇の性格差を物語るものとして注目を惹く。

以上のように、地区の枠を解いて検討したところ、農業・商工業・ホワイトカラー的職業の順に神棚・仏壇の保持率が高く、核家族世帯よりも拡大家族世帯において保持率が高く、居住歴が長いほど保持率が高く、さらに創設世帯よりも相続世帯において保持率が格段に高いことが判明した。したがって、農業が代表的職業であり、拡大家族世帯、居住歴の長い世帯、相続世帯の比率の大きい農村地区の神棚・仏壇保持率が最も高く、ホワイトカラー的職業が代表的職業であり、核家族世帯、居住歴の短い世帯、創設世帯の比率の大きい住宅地区における保持率が最も低く、商工業が代表的職業であり、世帯構成、世帯の来歴において中間的な商業地区の保持率が中位になることは、つまり、3地区の神棚・仏壇保持率に組織的な差が存することは、当然というべきであろう。

3地区の差を、代表的職業、世帯構成、世帯の来歴、それぞれの差の組合せとして説明してみたのであるが、それによって説明しつくされぬことは表7から表10までの分析で明らかである。すなわち

- (1) 3地区の何れにも10件以上ある商工業とホワイトカラー的職業をとりあげ、それぞれ地区別に神棚・仏壇の保持率を検討すると、同じ範疇の職業でも住宅地区のそれよりも商業地区のそれの方が、また商業地区のそれよりも農村地区のそれの方が、保持率が高い。これは、職業差の内部にこれまでみたのと同様な地区差が存することに外ならず、この地区差を職業差から説明することは不可能である。(表7)
- (2) 同様に、核家族世帯について地区別に保持率をみると、上に指摘したのと全く同一の傾向を地区の間に認めることができる。拡大家族世帯については、商業地区と住宅地区の間に差を見出すことは困難であるが、農村地区とこれら2地区の間には明瞭な差が存在する。われわれは地区差を世帯構成の差から説明しようとしたが、ここに見られる同一世帯構成内部の地区差が、世帯構成からは説明不可能であることは明らかである。(表8)

表 7 職業別、地区別、神棚・仏壇の存否

		神棚・仏壇	神棚のみ	仏壇のみ	両方ともなし	計
商 工 業	農村地区	83.3 (10)	16.7 (2)	—	—	100.0 (12)
	商業地区	47.4 (36)	15.8 (12)	26.3 (20)	10.5 (8)	100.0 (76)
	住宅地区	35.3 (6)	17.6 (3)	11.8 (2)	35.3 (6)	100.0 (17)
ホカ ワ イ ト	農村地区	85.7 (12)	7.1 (1)	7.1 (1)	—	100.0 (14)
	商業地区	44.4 (8)	22.2 (4)	16.7 (3)	16.7 (3)	100.0 (18)
	住宅地区	20.3 (15)	21.6 (16)	23.0 (17)	35.1 (26)	100.0 (74)

表 8 世帯構成別、地区別、神棚・仏壇の存否

		神棚・仏壇	神棚のみ	仏壇のみ	両方ともなし	計
核 家 族 世 帯	農村地区	74.3 (26)	14.3 (5)	8.6 (3)	2.8 (1)	100.0 (35)
	商業地区	32.2 (19)	25.4 (15)	18.7 (11)	23.7 (14)	100.0 (59)
	住宅地区	12.5 (10)	25.0 (20)	18.8 (15)	43.8 (35)	100.0 (80)
拡 大 家 族 世 帯	農村地区	96.5 (55)	1.8 (1)	1.8 (1)	—	100.0 (57)
	商業地区	61.4 (27)	4.5 (2)	31.8 (14)	2.3 (1)	100.0 (44)
	住宅地区	65.0 (13)	—	35.0 (7)	—	100.0 (20)

(3)居住の長さを20年未満と20年以上に分け、それぞれ地区別に分析すると、20年未満ではこれまでに指摘されたのと同様な保持率の地区差が明瞭に観取される。他方20年以上では、住宅地区の世帯数が少なすぎるため傾向を

表 9 居住歴別、地区別、神棚・仏壇の存否

		神棚・仏壇	神棚のみ	仏壇のみ	両方ともなし	計
20 年 未 満	農村地区	40.0 (6)	33.3 (5)	20.0 (3)	6.7 (1)	100.0 (15)
	商業地区	28.6 (18)	25.4 (16)	23.8 (15)	22.2 (14)	100.0 (63)
	住宅地区	13.5 (12)	22.5 (20)	24.7 (22)	39.3 (35)	100.0 (89)
20 年 以 上	農村地区	97.3 (71)	1.4 (1)	1.4 (1)	—	100.0 (73)
	商業地区	70.0 (28)	2.5 (1)	25.0 (10)	2.5 (1)	100.0 (40)
	住宅地区	100.0 (71)	—	—	—	100.0 (11)

示す上に欠陥があるとみてこれを除外すれば、農村地区と商業地区の間に同様の差を見出すことができる。居住の長さを一定にした時に出現する地区差をも、居住歴から説明することは不可能である。(表9)

- (4)世帯を相続・創設に分け、それぞれを地区別に分析すると、農村>商業>住宅というこれまでにしばしば指摘された地区差が判然する。この地区差をも世帯の種類別で説明することはできない。(表10)

表 10 世帯の来歴別、地区別、神棚・仏壇の存否

		神棚・仏壇	神棚のみ	仏壇のみ	両方ともなし	計
創設世帯	農村地区	50.0 (6)	33.3 (4)	8.3 (1)	8.3 (1)	100.0 (12)
	商業地区	20.0 (9)	28.9 (13)	20.0 (9)	31.1 (14)	100.0 (45)
	住宅地区	11.8 (9)	23.7 (18)	19.7 (15)	44.7 (34)	100.0 (76)
相続世帯	農村地区	94.9 (74)	1.3 (1)	3.8 (3)	—	100.0 (78)
	商業地区	63.2 (36)	7.0 (4)	28.1 (16)	1.8 (1)	100.0 (57)
	住宅地区	58.3 (14)	8.3 (2)	29.2 (7)	4.2 (1)	100.0 (24)

以上、各別に点検してきたところから明らかなように、職業差、世帯構成の差、世帯来歴の差では、未だ必ずしも十分に保持率の地区差が説明されない。しかしあるいは問う人もあろう。例えば、農村地区のホワイトカラー世帯の保持率が商業地区・住宅地区のそれよりも高いのは、ホワイトカラー世帯における相続世帯の構成比（それぞれ79%、44%、26%）の差に由来するのではあるまいか。また、農村地区の核家族世帯における保持率が他の2地区のそれより高いのは、農村地区における核家族世帯もその大部分（63%）が相続世帯であるのに対して、他の2地区における核家族世帯の大部分（それぞれ63%、88%）が創設世帯であるからではないかと。それはそうでもあろう。だが、同じ創設世帯でも農村地区では50%が神棚・仏壇を保持しているのに、商業地区ではそれは20%、住宅地区では12%である、という著しい差はどうして説明できるであろうか。こうなれば、地区の文化的社会的相違という概念を持ち出さざるをえなくなるのである。すなわち、農村地区では創設世帯でも神棚をしつらえ、契機があれば仏壇も安置する文化パターンがあり、近

隣や親族との交際を通してこれらを具備する方向に社会的圧力が作用する。この文化パターンと社会的圧力は大都市商業地区では弱まりながらも作用し、住宅地区ではこれらの作用が最も微弱である、という地区差に着目しなければならぬ。⁽⁶⁾要するに、神棚・仏壇の保持率に農村地区＞商業地区＞住宅地区という明瞭な地区差が存し、この地区差をもたらしたものは、地区を代表する家族パターンの構成要素である職業差、世帯構成の差、世帯来歴の差などであるが、また地区毎の文化パターンや社会規範の相違も保持率の地区差を支える要因と考えなければならない。

4 神棚と仏壇に対する礼拝訓練

礼拝訓練にかんする質問は児童にだけ問われた。その形式は下の通りである。

おうちに神棚（仏壇）がありますか。

1 ある 2 ない

→神棚（仏壇）をおがむように、おうちの人からいわれますか。

11 よくいわれる

12 時々いわれることがある

13 全くいわれない

→というのは、おうちのだれですか。

1 父 2 母 3 そふ 4 そぼ

5 その他（ ）

この節は上の質問の結果を分析することに捧げられる。神棚・仏壇のあるなしについては前節で考察したので、本節では「おがむようにいわれる」児童の比率（礼拝要請率）と、いう人（礼拝要請者）についてまとめることになる。

礼拝要請率

表11は拝むようにいわれる頻度を地区別にみたものである。11「よくいわれる」と答えた件数は少ないから、11と12「時々いわれる」を合算して傾向

表 11 地区別、礼拝要請率

		総世帯数	保持世帯数	11. よく いわれる	12. 時々 いわれる	13. 全く いわれない	2. ない
神 棚	農村地区	100.0 (92)	94.6 100.0(87)	1.2 (1)	52.9 (46)	35.6 (31)	10.3 (9)
	商業地区	100.0 (103)	61.2 100.0(63)	4.8 (3)	38.1 (24)	46.0 (29)	11.1 (7)
	住宅地区	100.0 (100)	43.0 100.0(43)	2.3 (1)	55.8 (24)	23.3 (10)	18.6 (8)
仏 壇	農村地区	100.0 (92)	92.3 100.0(85)	8.2 (7)	56.5 (48)	29.4 (25)	5.9 (5)
	商業地区	100.0 (103)	68.9 100.0(71)	2.8 (2)	47.9 (34)	46.5 (33)	2.8 (2)
	住宅地区	100.0 (100)	45.0 100.0(45)	11.1 (5)	60.0 (27)	20.0 (9)	8.9 (4)

をつかむことにしたい。表11のなかの2「ない」というのは、実は神棚もしくは仏壇があるのに、あることを知らずに「ない」と答えたものであるから、13「全くいわれない」ものよりも一層礼拝の訓練から遠いといつて差支えないのである。表11によれば、拝むようにいわれる児童の比率は、神棚の場合58%ないし43%，仏壇の場合71%ないし51%で、保持率の上では神棚と仏壇に殆ど差がないのに、拝むようにいわれる比率では仏壇の方がいく分高い。そして、保持率では神棚・仏壇ともに大差をもって農村地区＞商業地区＞住宅地区となるのに、拝むようにいわれる比率では神棚・仏壇ともに住宅地区＞農村地区＞商業地区の順になり、地区差は小さい。念のために、3地区を代表する職業をとりあげ、しかも、農村地区の農業世帯、商業地区の商工業世帯、住宅地区のホワイトカラー世帯というように条件をコントロールして表12を作製したところ、表11と全く同一の結果がえられた。これらから、神棚・仏壇の保持率の高さは、児童に礼拝を要請する比率の高さに直接つながっていないことが判明する。農村地区と商業地区では保持率よりも礼拝を促す比率が格段に低くなっており、住宅地区では礼拝を促す比率ががらん低い保持率を上廻って、他の2地区における比率を凌駕しさえしているのである。なぜ、住宅地区では児童に礼拝を促す比率が高くなるのだろうか。神棚をとってみれば、農村地区では年中行事のさいに供物をして、児童にも礼拝をさせる機会が比較的多くあると考えられ、また商業地区では商売繁昌の

表 12 地区の代表的職業別、礼拝要請率

		総世帯数	保持世帯数	11. よく いわれる	12. 時々 いわれる	13. 全く いわれない	2. ない
神	農業世帯	100.0 (67)	95.5 100.0(65)	1.5 (1)	53.8 (35)	38.5 (25)	6.2 (4)
	商工業世帯	100.0 (76)	63.1 100.0(48)	4.2 (2)	41.7 (20)	41.7 (20)	12.5 (6)
棚	ホワイト カラー世帯	100.0 (74)	41.9 100.0(31)	—	61.3 (19)	19.4 (6)	19.4 (6)
	農業世帯	100.0 (67)	97.0 100.0(66)	6.1 (4)	59.1 (39)	31.8 (21)	3.0 (2)
仏	商業世帯	100.0 (76)	73.7 100.0(56)	3.6 (2)	53.6 (30)	39.3 (22)	3.6 (2)
	ホワイト カラー世帯	100.0 (74)	43.2 100.0(32)	9.4 (3)	62.5 (20)	18.7 (6)	9.4 (3)
壇	農業世帯	100.0 (67)	97.0 100.0(66)	6.1 (4)	59.1 (39)	31.8 (21)	3.0 (2)
	商業世帯	100.0 (76)	73.7 100.0(56)	3.6 (2)	53.6 (30)	39.3 (22)	3.6 (2)
壇	ホワイト カラー世帯	100.0 (74)	43.2 100.0(32)	9.4 (3)	62.5 (20)	18.7 (6)	9.4 (3)

ために神棚を祭り、児童に神棚の取扱いを教える機会がかなりあるものと予想されるのに対して、住宅地区ではこうした条件に乏しい。それは、神棚がありながらあることをも知らないでいる児童の比率が、3地区中で最も高いところにも反映しているといえよう。しかるに、児童に礼拝を促す率も高いのは何故であろうか。この点に関する限り、われわれの今回の分析では、納得のいく説明に到達することができなかった。しかし、この3地区に対する調査項目のうち、育て方の諸領域に関する項目の分析によれば、住宅地区では児童の養育に他の2地区よりも一般的により多く手をかけ、細かい配慮を⁽⁷⁾している。そのような配慮の一端が、神棚・仏壇を保持しているところではこれらに対する礼拝の要請に現われている、とも考えられるのである。

次に、核家族世帯と拡大家族世帯に分けて礼拝要請の比率をみると(表13),

表 13 世帯構成別、礼拝要請率

		総世帯数	保持世帯数	11. よく いわれる	12. 時々 いわれる	13. 全く いわれない	2. ない
神	核家族世帯	100.0 (174)	54.6 (95)	2.1 (2)	43.2 (41)	38.9 (37)	15.8 (15)
	拡大家族世帯	100.0 (121)	81.0 (98)	3.0 (3)	54.1 (53)	33.7 (33)	9.2 (9)
仏	核家族世帯	100.0 (174)	48.3 (84)	10.7 (9)	44.1 (37)	35.7 (30)	9.5 (8)
	拡大家族世帯	100.0 (121)	96.7 (117)	4.3 (5)	61.5 (72)	31.6 (37)	2.6 (3)

神棚・仏壇の保持率ほどの開きはないが、拡大家族世帯の方が児童に礼拝を要請する比率が高く、他方、神棚や仏壇があるのに、あることさえ知らないでいる児童の比率は低い。つまり、祖父母の双方もしくは一方が同居している世帯では、これを欠く世帯に比べて、神棚・仏壇ともに（ことに仏壇の）保持率が頗る高いばかりでなく、児童にこれらを拝むようにいう比率も比較的高いし、拝むようにいわれずとも児童の方で自分の家に神棚や仏壇があることを知らずにいる者の比率はきわめて低いのである。祖父母の存在が児童に対する礼拝要請の比率を高からしめ、また神棚・仏壇の認知率を高からしめているように思われることは、拡大家族世帯における礼拝要請者を示唆する点でも興味深いものがある。

世帯構成別よりも大きい保持率の差を示すのが世帯の来歴別であった。表14によって世帯の来歴別に礼拝要請の比率をみると、相続世帯の方が神棚・仏壇ともに断然高い保持率を記録しただけでなく、礼拝要請の比率においても創設世帯を凌ぎ、他面、存否の誤認率は低い。なお、礼拝要請および存否の誤認における相続世帯と創設世帯の開きは、拡大家族世帯と核家族世帯との開きよりも大きいことは注目すべきである。

最後に、他の事情が同じでも、児童の性別によって礼拝要請の比率に相違があるのではないかと、と思われる。表15はこの点を検討したものである。まず、保持率は、児童の性別とは無関係にきまるものであるだけに、ほぼ同率

表 14 世帯の来歴別、礼拝要請率

		総世帯数	保持世帯数	11. よく いわれる	12. 時々 いわれる	13. 全く いわれない	2. ない
神 棚	創設世帯	100.0 (133)	44.3 100.0 (59)	1.7 (1)	42.4 (25)	39.0 (23)	16.9 (10)
	相続世帯	100.0 (159)	82.4 100.0 (131)	3.0 (4)	52.7 (69)	35.1 (46)	9.2 (12)
	不明	(3)	(3)	—	—	(1)	(2)
仏 壇	創設世帯	100.0 (133)	36.8 100.0 (49)	10.2 (5)	38.8 (19)	38.8 (19)	12.2 (6)
	相続世帯	100.0 (159)	94.4 100.0 (150)	6.0 (9)	59.3 (89)	31.3 (47)	3.3 (5)
	不明	(3)	(2)	—	(1)	(1)	—

表 15 児童の性別、礼拝要請率

			総 数	該当児数	11. よく いわれる	12. 時々 いわれる	13. 全く いわれない	2. ない
神 棚	男	児	100.0 (150)	66.7 100.0(100)	4.0 (4)	52.0 (52)	32.0 (32)	12.0 (12)
	女	児	100.0 (145)	64.1 100.0(93)	1.1 (1)	45.2 (42)	40.8 (38)	12.9 (12)
仏 壇	男	児	100.0 (150)	70.7 100.0(106)	8.5 (9)	52.8 (56)	32.1 (34)	6.6 (7)
	女	児	100.0 (145)	65.5 100.0(95)	5.3 (5)	55.8 (53)	34.7 (33)	4.2 (4)

と見込まれたが、この予想通りになっている。つぎに、神棚の礼拝については、女兒よりも男児の方がこれを要請される率が高く、女兒の46%に対して男児は56%である。他方、仏壇への礼拝要請率は神棚の場合よりも高く、しかも男女ほぼ同率の61%となっている。これは、仏壇の方が神棚よりもより多く日常的給仕の対象となっており、神棚は祭の前や歳末など特別の時でなければ掃除をしたり供物を捧げたりしないことを反映するものであろう。そして、比較的日常的な仏壇の場合には、その給仕や礼拝に男女児ともに巻き込まれやすいが、特別のときにだけ奉育する神棚にあっては、ふつう高い所に安置されているその祠の掃除や供物の手伝いには、女兒よりも男児が動員されやすいことを暗示するように思われるのである。もちろん、神棚は男子による祭祀がふさわしいと観念されていることも、男児（そのことごとくが長男であることを想起せよ）がより多く動員される基礎にある、と考えなければならぬ。

以上の検討によって、礼拝要請率は、

- (1)創設世帯におけるよりも相続世帯において高く、また、核家族世帯におけるよりも拡大家族世帯において高い。その差は保持率の場合ほど大きくはないが、保持率の大小と同じ傾向を示していること。
- (2)商業地区よりも農村地区にて高く、農村地区よりも住宅地区において高い。それぞれの地区を代表する職業を抜き出して検討しても全く同様な結果がえられる。この順序は保持率の地区順、職業順と一部異なっているが、そ

の理由は充分には明らかでない。

- (3)神棚に対するよりも仏壇に対して高く (51%対61%)、その差は保持率の差 (65%対68%) より大きい。仏壇に対しては男女児はほぼ同率であるが、神棚に対しては男児の方が高い。これらは、神棚に比して仏壇がより日常的な礼拝対象である、と考えることによってある程度説明することができる。

礼拝要請者 (訓練担当者)

児童に神棚や仏壇を礼拝するようにいうのは誰であろうか。表16はこの点を地区別に観察したものである。単独で要請者として現われる比率の高いのは、農村地区では母とそば、商業地区では父・母・そば、住宅地区では母と父である。まず、母とそばの礼拝要請者としての重要性が注目されよう。つぎに、父母が単独か共同かで要請者となる比率(A)と、そふぼが単独か共同か、もしくは父母と共同かで要請者となる比率(B)とを比較すると、農村地区では4対6、商業地区では7対3、住宅地区では7対2となり、農村地区におけるそふぼの重要性と、商業・住宅地区における父母の重要性が判然するのである。

誰が礼拝を要請するかは、全般的なしつけの担当者が誰であるかというこ

表 16 地区別、礼拝要請者

		父	母	父母	そふ	父 そふ	母 そふ	そば	父 そば	母 そば	父母 そば	そふぼ	その他 無	計
神 棚	農村地区	6.4 (3)	17.0 (8)	14.9 (7)	8.5 (4)	2.1 (1)	4.3 (2)	31.9 (15)	4.3 (2)	4.3 (2)	4.3 (2)		2.1 (1)	100.0 (47)
	商業地区	48.2 (13)	14.8 (4)	3.7 (1)	7.4 (2)			18.5 (5)					7.4 (2)	100.0 (27)
	住宅地区	24.0 (6)	36.0 (9)	12.0 (3)	4.0 (1)			8.0 (2)	4.0 (1)	4.0 (1)			8.0 (2)	100.0 (25)
仏 壇	農村地区	5.5 (3)	23.6 (13)	9.1 (5)	7.3 (4)	1.8 (1)	3.6 (2)	20.0 (11)		7.3 (4)	1.8 (1)	1.8 (1)	18.2 (10)	100.0 (55)
	商業地区	27.8 (10)	36.1 (13)	5.5 (2)	5.5 (2)			22.2 (8)					2.8 (1)	100.0 (36)
	住宅地区	15.6 (5)	37.5 (12)	9.4 (3)				3.1 (1)	6.3 (2)	15.6 (5)			12.5 (4)	100.0 (32)

(注) 父母そふ、父そふぼ、母そふぼ、父母そふぼ、は理論的に可能な組合せであるが、実際には1件もない。

表 17 地区別、しつけ担当者

		父	母	父母	父母 そふ	父母 そぼ	父・母 そふぼ	母そぼ	いない	計
神 棚 に 該 当	農村地区	6.4 (3)	78.7 (37)	6.4 (3)	2.1 (1)		2.1 (1)		4.3 (2)	100.0 (47)
	商業地区	11.1 (3)	51.9 (14)	18.5 (5)			3.7 (1)	7.4 (2)	7.4 (2)	100.0 (27)
	住宅地区	4.0 (1)	80.0 (20)	8.0 (2)		4.0 (1)	4.0 (1)			100.0 (25)
仏 壇 に 該 当	農村地区	5.5 (3)	78.2 (43)	10.9 (6)	1.8 (1)		1.8 (1)		1.8 (1)	100.0 (55)
	商業地区	5.5 (2)	52.8 (19)	25.0 (9)		2.8 (1)	2.8 (1)	8.3 (3)	2.8 (1)	100.0 (36)
	住宅地区	9.4 (3)	75.0 (24)	9.4 (3)		3.1 (1)	3.1 (1)			100.0 (32)

とつぎあわせてみる時、一層よくその意味をとらえることができる。神棚・仏壇があり、かつ児童に礼拝を要請している世帯について、誰が当該児童のしつけを主に担当しているかを一覧にした表17によれば、どの地区でも主なしつけ手は母である。母への集中が比較的にぶい商業地区ですら5割をこえ、他の2地区では8割になんなんとしている。つぎに、前と同様な手順で(A)と(B)を算出して比較すれば、農業・住宅地区では9割、商業地区では8割(A)に集中しているのである。しつけ一般における母親中心、もしくは父母中心に対して、礼拝要請における母から父・そぼ、父母からそふぼへの拡散が注目されよう。そふぼへの拡散は農村地区において顕著であり、農村地区における比較的高い礼拝要請率は、そふぼの参加に負うものと推測される。

農村地区において、そふぼが礼拝要請に参加する比率が高いのは、他の地区におけるそふぼよりも神棚や仏壇の礼拝に深い関心を有するからであるかもしれない。また、他の地区におけるそふぼよりも権威があるためであるのかもしれない。この2点は、世帯構成別神棚・仏壇保持数に対するそふぼの礼拝要請参加数の比の地区別比較によって支持されるが、より重要なのは農村地区の神棚・仏壇保持世帯にはそふぼを含む拡大家族世帯が多いという事実である(表8)。そこで、最後に、世帯構成別に礼拝要請者を分析しなければならぬ。表18は、地区別をとく、拡大家族世帯をさらに3類にくだいて、

表 18 世帯構成別、礼拝要請者

世帯構成		いう人												その他 無答	計
神 棚	両親、子	32.6 (14)	41.9 (18)	18.6 (8)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6.9 (3)	100.0 (43)
	両親、 そふ	9.1 (2)	4.5 (1)	4.5 (1)	22.7 (5)	—	4.5 (1)	50.0 (11)	—	4.5 (1)	—	—	—	—	100.0 (22)
	両親、 そ	25.0 (2)	12.5 (1)	—	25.0 (2)	12.5 (1)	12.5 (1)	—	—	—	—	—	—	12.5 (1)	100.0 (8)
	両親、 そ	15.4 (4)	3.8 (1)	7.7 (2)	—	—	—	42.3 (11)	11.5 (3)	7.7 (2)	7.7 (2)	—	—	3.8 (1)	100.0 (26)
仏 壇	両親、子	21.7 (10)	50.0 (23)	13.0 (6)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	15.2 (7)	100.0 (46)
	両親、 そふ	13.0 (3)	17.4 (4)	4.3 (1)	17.4 (4)	—	—	30.4 (7)	—	4.3 (1)	—	4.3 (1)	—	8.7 (2)	100.0 (23)
	両親、 そ	18.2 (2)	9.1 (1)	9.1 (1)	18.2 (2)	9.1 (1)	18.2 (2)	—	—	—	—	—	—	18.2 (2)	100.0 (11)
	両親、 そ	7.0 (3)	23.2 (10)	4.7 (2)	—	—	—	30.2 (13)	4.7 (2)	18.6 (8)	2.3 (1)	—	—	9.3 (4)	100.0 (43)

(注) 横線で消したのは、ありえない欄である。

この点を示したものである。

さて、核家族世帯では、神棚・仏壇ともに、母親が礼拝を児童に要請する比率が最も高く、4～5割に達する。それに次ぐのは父親で2～3割になる。ところが拡大家族世帯では母親の比率は著しく低くなり、また父親の比率も多少下って、その代りに、そふぼやそふぼと父母の組合せが高い比率で現われてくる。なかでもそぼが礼拝訓練において果す役割は最も著しく、3割から5割に達するのである。つまり、拡大家族世帯では、父母のほかにそふぼの双方ないし一方が礼拝訓練者に加わり、しかも後者の方がより重要な役割を果たす。それゆえ、核家族世帯よりも高い礼拝要請率を示したということになる。

右の点を、さきと同様の手順によって一般的なしつけ担当者との対比においてとらえなおす意図で編成されたのが、表19である。もちろん、神棚・仏壇があり、かつそれらへの礼拝を要請されている児童に限って集計された。これによると、母親がしつけ担当者である率は7割内外に達し、拡大家族世

表 19. 一般的なしつけ担当者

担当者 世帯構成		父	母	父母	父母 そふ	父母 そぼ	父 母 そふぼ	母 そぼ	いない	計
神 棚 に 該 当	両親、子	9.3 (4)	74.4 (32)	9.3 (4)	—	—	—	—	7.0 (3)	100.0 (43)
	両親、子 そふぼ	4.5 (1)	72.7 (16)	9.1 (2)	—	—	13.6 (3)	—	—	100.0 (22)
	両親、子 そふ	12.5 (1)	50.0 (4)	25.0 (2)	12.5 (1)	—	—	—	—	100.0 (8)
	両親、子 そぼ	3.8 (1)	73.1 (19)	7.7 (2)	—	3.8 (1)	—	7.7 (2)	3.8 (1)	100.0 (26)
仏 壇 に 該 当	両親、子	8.7 (4)	73.9 (34)	15.2 (7)	—	—	—	—	2.2 (1)	100.0 (46)
	両親、子 そふぼ	8.7 (2)	65.2 (15)	8.7 (2)	—	—	13.0 (3)	4.3 (1)	—	100.0 (23)
	両親、子 そふ	9.1 (1)	54.5 (6)	27.3 (3)	9.1 (1)	—	—	—	—	100.0 (11)
	両親、子 そぼ	2.3 (1)	72.1 (31)	14.0 (6)	—	4.7 (2)	—	4.7 (2)	2.3 (1)	100.0 (43)

帯でも母親への集中は弱められていない。つまり、そふぼへの拡散はあまりみられないのである。そふぼが主なしつけ手として登場しても、必ず父母と組合せになっており、そふぼだけで主なしつけ手となることはない。世帯構成がいかようであれ、児童の両親が健在するところでは、父母、とりわけ母親が主なしつけ手の役割を果し、そふぼが同居していても、彼らは一步退いた立場にあることは明らかである。⁽⁸⁾ところが、神棚・仏壇の礼拝については、そふぼがおればむしろ彼らが、とくにそぼが、礼拝を促す主なしつけ手として立ち現われてくる。また、しつけ一般においては父親の影は薄い、神棚・仏壇の礼拝については父親は重要であり、拡大家族世帯では母親を凌ぐ。要するに、しつけ一般における母親への集中に対する神棚・仏壇の礼拝における父親その他への拡散と、しつけ一般におけるそふぼの軽さに対する神棚・仏壇の礼拝におけるその重要性、この2様のコントラストが注目されるのである。

5 要約と結論

われわれはまず農村地区・大都市商業地区・大都市住宅地区を各1か所ずつ東京およびその近県でとりあげ、それぞれの地区を代表する異なった家族パターンを確認することに出発した。そして、伝統的宗教行動のなかでも最も基礎的かつ一般的と考えられる神棚・仏壇の礼拝についての、小学校上級児童に対する訓練に、家族パターンに対応するような差があるかどうか、を探索しようとしたのである。その結果、神棚・仏壇の保持率に組織的にみられた地区差、職業差、世帯構成による差、世帯来歴による差から、家族パターンにより保持率に差があるといつてよいことが明らかになった。次に、礼拝要請率については、世帯構成による差と世帯来歴による差は保持率でみた傾向と一致し、他方、地区差と職業差は保持率でみた傾向と一致しない。しかし、このくい違いに納得のいく説明を与えることは困難であった。最後に、礼拝要請者については、しつけ一般が母親に集中するのに対して、農村地区と拡大家族世帯では母からそばへの拡散が著しく、商業地区・住宅地区と核家族世帯では父への拡散が著しい、といえよう。この地区差と世帯構成差はある程度結びついている。

以上を家族パターン別に整理すれば下の通りである。

- (1)農村地区を代表する農業世帯は形態と意識の両面で旧家族制度的要素を多分に保持している(昭42,表11)。ここでは神棚・仏壇の保持率が最も高く(97~8%),礼拝要請率もかなり高い(55~65%)。要請者に母とそばが多い。
- (2)商業地区を代表する商業世帯は、形態と意識の両面で中間的である。ここでは、神棚・仏壇の保持率が中位(63~74%)であるが、礼拝要請率は最も低い(46~57%)。要請者は父母そばに分散している。
- (3)住宅地区を代表するホワイトカラー世帯は、形態と意識の両面で旧家族制度的要素から最もよく脱却している(昭42,表11)。ここでは、神棚・仏壇の保持率が最も低い(42~3%)が、礼拝要請率は最も高い(61~72%)。要請者に母と父が多い。

都市化の進行、自営業に対するホワイトカラー的職業の増加を前提とし、

かつ、一定の組織的異同を示す3地点の現時点における比較から歴史的推移に関する図式を抽出しようというレッドフィールドの⁽⁹⁾想定にならうならば、神棚・仏壇の保持率は低下するとともに上昇することはないと考えられる。しかし、それはそのまま礼拝要請率の低下を伴うとは限らないが、保持率が低下する以上、児童に対する基本的行動の訓練における伝統的宗教行動の訓練の機会が、全体としていよいよ少なくなっていくものといわなければならない。

注

- (1) E・Z・ダジャーが「社会化と児童のパーソナリティ発達」に関する研究を、社会化と育て方（社会構造や文化主題の）を従属変数とする研究、社会化と育て方を（パーソナリティ発達の）独立変数とする研究、の二群に分けている。しかし、社会構造や文化主題を直接にパーソナリティ発達の独立変数とする研究もあるのではないと思われる。Edward Z. Dager, "Socialization and Personality Development in the Child," in H. Christensen (ed.), *Handbook of Marriage and the Family*, Chicago: Rand McNally, 1964, pp. 740—781.
- (2) さきに掲げたセミナーの主題の正式な邦訳は、「異なる家族パターンにおけるしつけ」であった。英語のテーマを著しく限定して、「異なる家族パターンと児童の育て方」という問題にひきつけた邦訳であることが明らかである。限定は、「児童の育て方」を「しつけ」と表現したことによって強化されている。何故なら、しつけというのは「児童の育て方」のうち、ある社会規範や文化の基準に児童を馴致する行動をさすが、「育て方」はしつけだけではない。児童の発達に即した、より柔軟で個性的なものをも含んでいるからである。“child-rearing practices”にあたる邦語として、不充分だとは知りながらしつけを選ぶはかなかつたところに、わが国の児童養育に関する文化的特色が反映している。
- (3) (A)(B)(2)(3)の細目は、昭和39年9月27日付の第9回国際家族研究セミナー主題解説を参照した。
- (4) 森岡清美「家族パターンからみた都市と農村の家族」『厚生指標』14巻7号（昭和42・7），7—12頁。括弧内で（昭和42，表）と本稿に註記してあるのは、上の論文所載の表を指している。
- (5) 相続世帯・創設世帯の概念は小山隆に負うものである。小山「相続世帯と創設世帯における親族関係」東京都立大学『人文学報』40号，昭和39・3，13—16頁。表現は異なるが、全く同一の基準に立った世帯の分類は、川越淳二の継承家族と分出家族の概念に示されている。川越「都市家族の存在形態」『フィロソフィア』39号，昭和35・6，94頁。

付表 1 地区別、個人の宗教の有無別、神棚・仏壇の存否

	個人の宗教	総世帯数	神棚あり	仏壇あり
農村地区	あり	(28.3) 26 (100.0)	25 (96.2)	24 (92.4)
	なし	(71.7) 66 (100.0)	62 (93.9)	61 (92.4)
商業地区	あり	(17.5) 18 (100.0)	12 (66.7)	14 (77.7)
	なし	(82.5) 85 (100.0)	51 (60.0)	57 (67.1)
住宅地区	あり	(17.0) 17 (100.0)	6 (35.3)	12 (70.6)
	なし	(83.0) 83 (100.0)	37 (44.6)	33 (39.8)

「あり」とは父母の一方もしくは双方が個人の宗教ありとしたもの、「なし」とは双方がなしとした、もしくはありとしなかったもの。

- (6) この点は、児童の父母の一方ないし双方が個人の宗教ありとしたものについてみた神棚・仏壇の保持率と、父母がともに個人の宗教なしとした、もしくはありとしなかったものについてみた保持率との、地区別比較にあらわれている。すなわち、農村地区では両群の保持率に全く差がなく、個人の宗教の有無にかかわらず保持率が高いのである。だから文化パターンの存在を前提せざるをえなくなる。商業地区では、「あり」の方が若干保持率が高く、住宅地区では、神棚については「なし」よりも却って低く、仏壇については通かに高い(付表1)。どの地区でも個人の宗教の圧倒的部分を仏教系が占めているため、とくに仏壇の保持にアクセントが置かれ、このことが、文化パターンの存在形態とからんで、前記のような保持率の差を生ぜしめているといえよう。付表2によれば、個人の宗教のある世帯では全体として非保持率がきわめて低いこと、キリスト教を個人の宗教として挙げた世帯にも、神棚・仏壇の双方もしくはその何れかがあることは、注目に価するといわねばならない。

付表 2 信仰の系統別、地区分布と神棚・仏壇の存否

	農地 地区	商業 地区	住宅 地区	神 棚 仏 壇	神 棚 の み	仏 壇 の み	両方と もなし	計
神道系	1(3.8)	2(11.1)	2(11.8)	2	3	—	—	5
仏教系	25(96.2)	15(83.3)	13(76.5)	33	3	13	4	53
キリスト 教系		1(5.6)	2(11.8)	1	1	1	—	3
計	26 (100.0)	18 (100.0)	17 (100.0)	36	7	14	4	61

神道系に天理教など教派神道系を含み、仏教系に創価学会・立正佼成会等を含む。父母は、ともに同じ宗教をもつのでなければ、有信仰と無信仰の組合せで、異なる信仰の組合せはなかった。

(7), (8) 付表3を参照せよ。

付表3 しつけ(注意)をする領域の数(9領域)

地域	児童	しつけ手		父	母	そ ぶ	そ ぼ
		男	女				
農村地区	男			2.45	5.55	0.92	0.96
	女			1.85	6.12	0.40	0.82
商業地区	男			2.36	5.34	0.47	1.10
	女			1.86	5.98	0.40	1.48
住宅地区	男			3.09	6.98	0.66	0.86
	女			2.89	7.07	2.00	1.27

(9) Robert Redfield, "Culture Changes in Yucatan," *American Anthropologist*, Vol. 36 (1934), pp. 57—69.

〔付記〕本研究は、小山隆氏を代表者とする文部省科学研究費交付金による総合研究（昭和38, 39, 40年度）のうち、田村喜代氏と筆者が担当した小学校児童に対するしつけの研究成果の一端である。調査にあたり、山梨県八代町教育委員会、八代町立八代小学校、御所小学校、東京都教育庁指導部、杉並区教育委員会、杉並区立第二小学校、台東区教育委員会、台東区立柳北小学校、同育英小学校から多大のご協力をたまわった。また、東京教育大学、東京学芸大学、山梨大学の学生諸君には面接調査員として協力していただいた。とくに小林勲夫君は有意差の検定を担当してくれた。そのほか、総合研究のメンバーの方々には種々お世話になった。関係者各位に深甚なる謝意を表する。（1967・2・24稿，1971・9・1補）